

ふたりのコラム

September 30, 2020

認定こども園あかみ幼稚園	園長	中田幸子
認定こども園メイプルキッズ	施設長	新井利枝

《3・4・5歳児》

暑さ寒さも彼岸まで・・・昔からそのように言われてきた通り、こんなに暑かった今年でも、彼岸を過ぎたら朝晩涼しくなり、過ごしやすくなってきましたね。虫の音が心地よく感じ、また稲穂も黄金色に染まり首（こうべ）を垂れ、秋を感じさせてくれます。食べ物もおいしくなる季節ですね。

2学期…子どもたちの生活も充実する時期です。行事等では、保護者の方々の参加制限などを設け、普段とは形が異なる場面もありますが、子どもたちの遊びや生活は充実できるよう、学びの保証をしていきたいと思っています。



もうすぐ運動会！！

先日、みんなのはらっぱで4歳児のあるクラスの子どもたちが、エンドレスにグラウンドを走り回っていました。どの子どももとっても嬉しそう！生き生きとした表情で、グラウンドにおかれた（山に見立てた）台を乗り越え、トンネルをくぐって、それぞれが近くの友達を意識しながら走っていました。途中、疲れた子どもたち数人が、水筒の水を飲みに行き少し休み、また輪に入ってきました。

楽しい環境で、子どもたちが、自分の意思で走り、自分の意思で休憩し、クラスの仲間と楽しい時間を過ごしているのを見て、やっぱりあかみ幼稚園の保育はいいなあと感じました。

行事のために特訓をするような園や学校はもう少ないと思います。…しかし、今でもあるようですね。特訓ではなくても、子どもたちが並んで、順番を待ってかけっこすることを繰り返し練習する園は多いと聞きます。並ぶことや順番を守ることは必要なことです。しかし、その時点で、子どもたちにそのことの必然性があるかどうか、重要だと思います。あかみ幼稚園の子どもたちも、最終的には並んで、順番を待って走ります。それは、子どもたちがその方がよいと思えるようになってくるからです。もちろん保育者の願いや目的があつてのことですが…。



学童期以降の学びは、初めから子どもたちは、ねらいを確認して学習を進めていきます。しかし、幼児期の子どもたちの学び方は、体験を通して、結果的に学ぶのです。保育者が、子どもたちにいかに必然性を感じさせるか、言い換えると、いかに動機づけをするかが、重要です。それが、子どもたちのやる気につながり、活動を活発にし、能力を高めることにつながるのです。

そもそも、行事って何のために行うんでしたっけ…？

行事には、当然のことながら、教育としての目的・目標があり、行事は、園生活の節目なのです。

(3歳)『みんなと一緒に楽しい』(4歳)『クラスの一体感を味わう』(5歳)『クラス意識の高まり』・・・。

それぞれの発達にあった活動を行い、運動機能の高まりも期待します。

詳しくは、運動会懇談会としての近日配信予定WEBで確認して下さい。

持続可能な開発目標 SDGs は、幼児にとっても大切なこと！！

10月21日に予定していたピカピカの栃木県(10万人美化運動)は中止となりました。

例年行っている、佐野市運動公園のごみ拾いは行いませんが、特に年長組中心に、改めてごみについて考える機会を持ちたいと思います。そして、ごみのことをきっかけに、環境について考えたり、調べたりすることに繋がってほしいと願います。



持続可能な開発目標 (SDGs) は国連で2015, 5月決議され、2016~2030の15年間をかけて達成していく、持続可能でより良い世界を築く国際目標であることは、ご存じの方も多いと思います。未来を担う子どもたちが、今、直接できることは少ないかもしれないけれど、自分たちが住む地球のことを今から考えられたら、将来大きな力になると強く信じています。身近な生活から、子どもたちが「より良く、住みやすい世界」のことを考えられるようになってほしいと思います。

ビオトープにメダカの放流を・・・



昨日、もり組の子どもたちが園内ビオトープに黒メダカを放流しました。

ビオトープ = [bio](#) (命) + [topos](#) (場所)。生物生息空間です。

前園長中山とともに、NPO めだかのがっこうで、数年かけてビオトープを作り上げてきました。この土地に合った生態系を作るため、園敷地の裏山より植物を移植して作ってきたものです。赤見は自然が多い地域ではありますが、身近にあることで、いろいろな気づきや発見ができます。そのような生態系再生のために、ビオトープを作りました。

また、中山は、園自体をビオトープに例え、そこで生活する乳幼児、保護者・職員が、生きいきとするとともに、地域再生の場となることを願っています。以下、ビオトープを作った6年後の記事をご覧ください。

ビオトープは、動植物などの生態系を再生させるためのものでした。そうであるならば、人・子どもにとっての生態系を再生させる仕組みも求められているのだろうと言えます。そして、そのビオトープ(再生の仕組み)の役割を認定こども園が果たせるのではないかと考えました。そこで再生したいのは、多様で豊かな人のコミュニティや有形・無形の構築物に囲まれた文化的な環境といったことです。認定こども園の「総合施設」機能が、このような環境を具現化し、子どもにとっての文化的な生態系の再生に寄与できるのではないかと考えました。(「発達2009」中山著の記事より引用)

(文責 中田)

《0・1・2歳児》

朝晩は、ずいぶん涼しくなり、秋の訪れを感じるようになってきましたね。園庭では、子ども達の元気な声があちこちで響き渡っています。過ごしやすいこの時期、戸外遊びを存分に楽しんで欲しいと思っています。

さて、先月号で、卒園生Kちゃんとそのお母さんのお話をしましたが、ちょっとその続きをしたいと思います。マザーグースの職員から聞いたのですが、Kちゃんのお母さんも一緒に参加した際に「昔から知ってる先生が沢山いて驚いたけど、戻ってくる人が多いってことは、よっぽど働きやすいんでしょうね、じゃなきゃ、普通戻ってきませんよ」と言われたとのことでした。

実は、マザーグースの職員も、元々、あかみ幼稚園の保育者として働き、結婚・出産を機に一時退職、その後また戻り、家庭と仕事を両立しながら働いています。

確かに、知ってる仲間がいるから働きやすい、そして何よりみんな、子どもと保育の仕事が大好きなんです！！保育は、大事な子ども達の命を預かる仕事ですから、決して楽しいことばかりではありませんが、あかみ幼稚園、メイプルキッズで働く職員は、みんな、自分の仕事に誇りを持っています。そして、そんな仲間と仕事ができることは、本当に幸せだなと思っています。



次に、ちょっと嬉しかった話・・・

私事ですが、伸ばしっぱなしにしていた前髪を久しぶりに短く切った次の日のこと・・・。年中組のある男の子が、テラスを歩いていた私に向かって「ねえ先生、髪切った？」と声をかけてきました。私が「え？わかったの？うん、切ったんだ」と答えると「わかるよ、かわいいよ！」との答え、久しく「かわいい」なんて言われたことがなかったので、思わずたじろいでしまいましたが、「気付いてもらえてうれしいよ」と答えると、その子もとてもうれしそうでした。その後もテラスで会った何人かの子が、私をじっと見て、「切ったの？」と声をかけてきました。

そのときは逆に私から「かわいい？」と聞くと、「う、うん」と困惑した表情の子もいました（笑）。

ほんの些細なやりとりですが、気付いてもらえるのってやっぱりうれしいなと思ったのと同時に、子どもっていろんなことをよく見てるんだな～とあらためて感じさせられた一日でした。

私達保育者も、子ども達の様子や子どもが発するサインをきちんと受け取り、保育に活かしていきたいと思いました。



子どもからのサイン・・・、これは、保育をする上でとても重要だと思っています。

特に、まだ言葉でうまく伝えることが出来ないメイプルキッズの子どもたちは、様々なサインを出してきます。

例えば、赤ちゃんがなんでも口に入れてしまったり、引き出しやティッシュなどすべて引っ張り出してしまったり、はたまた、机の上に上ろうとしたり・・・、大人にとっては困った行動のように感じますが、こうした行為にはみんな理由があるんです。

口に入れてしまうのは、舐めることによって、目で見た物の形や固さを確認しているのです。何でも引っ張り出したり、上ったりするのは、それだけ指先や足腰の力が発達して、上手に使えるようになったのがうれしくて繰り返しているのです。子どもの行為は、「できるよ」という喜びと「もっとやってみたい、できるようになりたい」という願望のサインなのです。子どもたちは、今発達していることを、最大限試しています。何度も繰り返し行うことは、その機能を獲得しようと頑張っている最中でもあります。

0・1・2歳児の遊びは、大人が思う遊びとはちょっと異なることが多々あります。握る・振る・積む・並べるなど、大人にとっては何でもないことが、この時期の子どもにとっては、とても楽しく魅力的に見えます。私達保育者は、子ども達の発達をよく理解し、子ども達からの成長のサインを見逃さず、子ども達がたっぷり遊びこめるような環境を用意します。例えば、0歳児や1歳児クラスには、ホースの切れ端やタッパーなど、大きいクラスの子から見れば、何して遊ぶの?と思うような物も置いてあります。穴の開いたタッパーにホースをポッと落として遊ぶのが、0歳や1歳の子にとってはたまらなく楽しいのです。



また、生活と遊びの連続性が不可欠な0・1・2歳児は、園での生活から毎日いろいろなことを学んでいます。食事の際にはエプロンを使用していますが、これは言うまでもなく、まだ大きいクラスの子たちのように上手に食事ができないからです。このエプロンも、以前は保育者が子どもたちに渡していましたが、最近では、子どもたちが自分で取ってから、席についています。



毎日の生活の繰り返しによって、ご飯のときにはエプロンをするという行為が子どもたち自身の中に定着し、自ら進んでできるようになってきました。この子どもたちからの成長のサインを保育者は見逃さず、こどもが取りやすい場所にエプロンを置いたり、すぐ探しやすいように子どもの顔写真を付けたりなどの工夫をしています。他にも、戸外へ遊びに行く際には、帽子をかぶり、靴下を履いて身支度をするなど、見通しをもって生活できるようになってきています。毎日繰り返す行為の質を上げていき、自立に繋げていくことも私達保育者の役割だと思っています。

(文責：新井)